JIEP 事務局長時代の想いで

橋本 薫*

Memories of My Life in the Era of Executive Director of JIEP

Kaoru HASHIMOTO*

* 明星大学 (〒191-8506 東京都日野市程久保 2-1-1)

* Meisei University (2-1-1 Hodokubo, Hino, Tokyo 191-8506)

JIEP 設立 20 周年おめでとうございます。20 周年記念特集号への寄稿を依頼されて、あらためて感慨にとらわれました。私が JIEP と関わりを持ったのは、前身の SHM (ハイブリッドマイクロエレクトロニクス協会) が 1980 年に第 1 回 IMC (International Microelectronics Conference) を開催した時であり、あれから 38 年、よくここまで発展し続けてきたものだなあという心境です。ここまで JIEP を育ててくれた諸先輩のご努力、貢献に敬意を表します。

さて、私に与えられました執筆テーマは「歴代事務局長随想」です。私が事務局長を務めた期間は 2005 年 1 月から 2008 年 3 月までという短期間でしたので多くは語るべきことはありませんが、思い出すままに綴らせていただきます。

会社をリタイアする時期を迎え、それまで会員として活動する中で多くの先輩、友人からご指導、啓発を受けて自身が成長できた恩返しの意味もあり、事務局に参画することを考え始めました。会員活動を続けながら事務局長も務める、ある意味でのプレーイング・マネージャーが学会に存在してもよいのではと思い、事務局長に応募しました。幸い当時の牧本会長のご英断で認めていただき、技術者上りの事務局長に就任しました。諸学会においてこのような例はないと思っていましたが、就任後、身近な人が二人も事務局長を務めていることを知り、驚きました。一人は実装分野で活躍されていた I 氏が応用物理学会の、もう一人は会社時代一緒に仕事をしたことのある O 氏が応用磁気学会の事務局長でした。

事務局長就任直後の最も優先すべき重要な任務は、主務官庁との信頼関係の回復でした。幸い、情報通信機器課(当時)の班長(課長補佐)殿とは電子 SI プロジェクトを通して旧知の間柄であり、「君(橋本)は事情、状況を何も知らないで事務局長になったのだろうが、なってしまったからには悪い巡り合わせと思って我慢してほしい」と慰められつつ強力なご指導を受けましたが、牧本会長の適切な指揮とご尽力によって良好な関係を構築し直すことができました。経済産業省の補助金事業である『平成 17 年度「情報家電活用基盤整備事業(電子実装技術の現状及び将来動

向調査)』を受託し、「中小企業のものづくり基盤技術の高度化に関する法律」(通称 サポイン)の法制化に協力したのは、その一環です。このときには、後任の大塚会長のご支援をいただくとともに、各技術委員会/研究会の主要メンバーの方々には原案執筆で多大なご迷惑をお掛けしながら、それにも関わらず業務多忙の中で全面的なご協力をいただいたことに感謝しています。同時に、JPCA の強力なご支援、ご助力にも改めて深謝いたします。

次に、学会内の融和を図ることが急務でした。二つの学会が合併して 7 年経過していたにもかかわらず合併前の両者の運営方針の違いなどから、全体の雰囲気まとまりを感じられるものではありませんでした。しかし、学会としての一体感を止揚するには「足して 2 で割る」という決め方は一利なしと考え、独善的ではありましたが是々非々で対応していきましましたので(もちろんバランスをとるよう配慮しましたが)、ご不満などを抱かれた会員の皆様が多数おられた(今現在も?)と思います。この点は私の能力不足の故と、ご容赦願います。ただ、大きな課題の 1 つであった技術委員会/研究会の予算管理について、重要な特定のテーマについて予算を特別に増額することを理事会で承認いただき、活動を活発化させる方策を立ち上げたことには満足いただけたのではないかと考えています(付帯条件がきつすぎるとの批判もありましたが)。

なお、学会の財政についてですが、私の事務局長時代は、合併前の両団体から引き継いだ資金もあり、内部留保が公益法人の限度額[記憶があいまいになってしまっていますが、確か年間予算(収入だったか?)の 20% であったと思います]を大幅に上回っていましたので、毎年その理由と減額対策の釈明書(正式名称ではありません)を提出していました。内部留保低減の妙案は無く、何とかつじつま合わせの対応をとっていましたところ、見かねた(上述の)班長殿から、監督者の立場であるにもかかわらず、使途は限定されるが早く「基金」化するよう助言されたことが今では懐かしい思い出です(当時のルールでは、基金は内部留保から除外されていました)。基金化は、後任の茨木

事務局長の時代に実現されました。

内部留保に関連して、JIEP が学会としては珍しい存在であることも再確認しました。釈明書提出の指示書には、経済産業省を主務官庁とする団体（社団法人）すべての内部留保状況をまとめた表が添えられていました。個人的興味もあり団体名をすべて読んだところ、「学会」と名のついた団体は JIEP のみでした。経済産業省を主務官庁とする学会は JIEP のみであることを改めて確かめた次第です。

私が事務局長に就任した時に、牧本会長が唱えられた「JISSO（ジェイ・アイ・エス・エス・オー）を世界に広めよう」とのスローガンのもと、その中核となるべき JIEP のあるべき姿を求める「JIEP 発展構想委員会」が設置され、審議が進められました。その際、事務局員の日頃の努力を無にするかのごとき、事務局業務の実態を認識されていない意見が出され、これについて事務局一丸となって再考してもらったことがありました。「事務方は口を出すな」と言う意見もあるかとは思いますが、少なくとも私自身はそれまでの学会活動経験を踏まえ、学会とは会員と事務局員とが一致協力し、共同で創り上げていくものと思っています。近頃、諸活動の最前線から一歩離れたところから現状を見ていますと、会員と事務局員との間がしっくりいかず、自由闊達な意見交換などが失われているように思われ、時の流れかもしれないが一抹の寂しさを感じています。批判をおそれずに敢えて言わせていただければ、学会の財務健全化の一施策かもしれませんが、各種イベントの運営を外部委託することが多くなってきていることも、一因ではと思います。少しでも良い講演会にして会員の皆様に満足していただくには、他人頼みではなく、組織委員と担当事務局員とがお互いに忌憚なく議論することも大切ではないかと思っています。このことが相互理解・信頼にもつながるのではないのでしょうか。

このような中で、ICEP、講演大会、MES、ワークショップなどかって組織委員として参画していた各種のイベントに事務局長として臨んだのですが、組織委員の時とは違う緊張感を味わいました。開催前日における準備状況の最終確認など後方支援に万全を期すのは当然のことで、一つのミスも許されないと気を引き締めて対処しました。会場に最初に着き、最後に帰ることを心がけました。さて、イベントが始まると、後方支援要員であるにもかかわらずいつのまにか質疑応答に参加してしまい、皆様の不興を買ったのではと反省もしています。

次いで、「英文論文誌」発刊、「IMAPS Japan 国際会員」制度などいくつかのことを立ち上げたことも思い出します。紙数の関係もありますので、英文論文誌発刊の思い出について記します。英文論文誌の発刊は故友景 肇副会長（当時）の音頭取りで準備を始めましたが、友景氏のご指名（業務命令？）で当初から編集委員含みで活動しました。会合のたびに「これは事務局の立場としては…」、「このこと

は編集委員（会員）の立場では…」と枕詞付きで発言していたことを思い出します。また、査読を行っている際、事務局の立場では 1 件でも多くすなりと採録したいが、査読委員としては学会の品位を高く保つよう原稿の不適切、不備な箇所を厳しく指摘して修正してもらわなければならない、ジレンマに悩んだこともありました。生憎と第 1 巻発刊前に退任してしまいましたが、無事発刊できた時には我が分身が生まれたように感激しました。発行までにさんざん迷惑をかけたにも関わらず誠実に対応していただきましたレタープレス社様にも改めて感謝いたします。友景さん、あなたが種を蒔いた英文論文誌は立派に育っていますよ。（もしあの世というものがあるならば、そこから）さらなる発展を見守っててください。

ここで、あるエピソードを思い出しました。若い会員の方々はご存じないかと思いますが、私が事務局長になる前から、ガス湯沸かし器による死亡事故の多発が社会問題になっており、2006 年には某社に対して経済産業省から製品の回収命令が出されました。あるとき事務所に警視庁の捜査官が突然来訪され、事故原因がはんだ付け部にあるとの疑いがあるので（予断はご法度であるが）、専門の研究者で、できれば中立性の高い人を紹介していただきたいとの依頼がありました。私も会社時代にはんだ付けの材料・プロセス技術や接合信頼性評価に携わっていた時期がありましたので、旧知の方々にあらかじめ事情を説明して、ご了解の意思を確認した上で捜査官に紹介しました。これで終わったものと思っていましたところ、すっかり忘れた頃に同じ捜査官が捜査協力のお礼に来られました。たいしたこととしていないのに、警視庁もけっこう義理堅いところがあると妙に感心しました。しかも、手土産持参でした。

こうして事務局長を務める中、（私事で恐縮ですが）退任 1 年前くらいから認知症の母親の介護と妻の看病とを同時に行わなければならない状況になり、しだいに心身とも疲労困憊して事務局長としての職務・職責を十分に果たすことが困難になり、会員の皆様に多大なご迷惑をお掛けしましたことを、この誌面をお借りしてお詫びいたします。

今年で 20 周年、では次の 20 周年にはどのような学会になっているのでしょうか。新分野を切り拓きつつたくましく発展・変身している姿を想像しています（私は見ることはできませんが）。

結びに、不肖の私が事務局長の大任を果たせたことはひとえに会員の皆様のおかげであり、深く感謝いたします。

【余談】

以下に、事務局長時代に経験したとりとめのないことを述べさせていただきます。現在ではもはやなくなってしまうこともあるかと思いますが、かつてはこんなことがあったということを若い会員の方々に言い残しておくことも意義あることではないかと愚考し、思いつくままに記

します。

(1) 袋とじ

公益法人は毎年主務官庁あてに年次報告書を提出する義務があります。初めてこれを作成したとき、仕上げは「袋とじ」と言われ、いまだにこのような習慣が残っているかと驚きました。

(2) キホドとキサダ

経済産業省による各団体の事務局関係者への説明会があった時、「キホド」、「キサダ」と耳慣れない用語が耳に入ってきました。ポカンとしていたら、隣に座っていた人から「キホド」は「規程」、「キサダ」は「規定」のことだと教えていただきました。きっと官庁 OB だったのでしょう。

(3) 実印（学会印）

毎年、理事が交代するたびに法務局に出向き登記変更します。その際、書類に実印（学会印）を押印するのですが、これが非常に厄介でした。印影にカスレや欠けがあ

り、印鑑登録している状態と少しでも異なっていると受理してもらえません（まったく同じということは不可能ですが、許容範囲はいまだに理解していません）。そこで、登記の時だけは、会長に事情説明して許可を得た上で、本来事務局から持ち出し厳禁の実印（学会印）を持参して、OK をもらえるまで押し直したこともありました。

まだまだたくさんの方がいましたが、紙数も限られていますので終わります。

(2018.7.10- 受理)

著者紹介

橋本 薫（はしもと かおる）

1971 年 3 月名古屋大学・工学部・応用物理学科卒業。同年 4 月（株）富士通研究所入社。以来、メインフレーム／スーパーコンピュータ用はんだ接合材料およびセラミック多層回路基板材料をはじめとする実装材料・技術の研究開発に従事。その後、（社）エレクトロニクス実装学会（現一般社団法人）事務局長を経て、現在明星大学・連携研究センター・常勤研究員。博士（工学）。